卒業生の勤務先訪問記

長門市立図書館

岡　田　　茂

晩秋の一日、佐藤、皆上、両先生と私の３人は、山口県の長門市立図書館に、平成９年度の史学科の卒業生、相部吏美さんを訪問した。前日に九州国際大学で西日本図書館学会の研究発表会と木村秀明先生の古希祝賀会があり、一泊して足を延ばし、関門海峡を渡ったのである。中国道の美祢インターを出て、紅葉の中国山脈を越え、長門市に入る。図書館を探して日本海側に出ると、長門の入江は島々が連なった水のきれいな漁港であった。

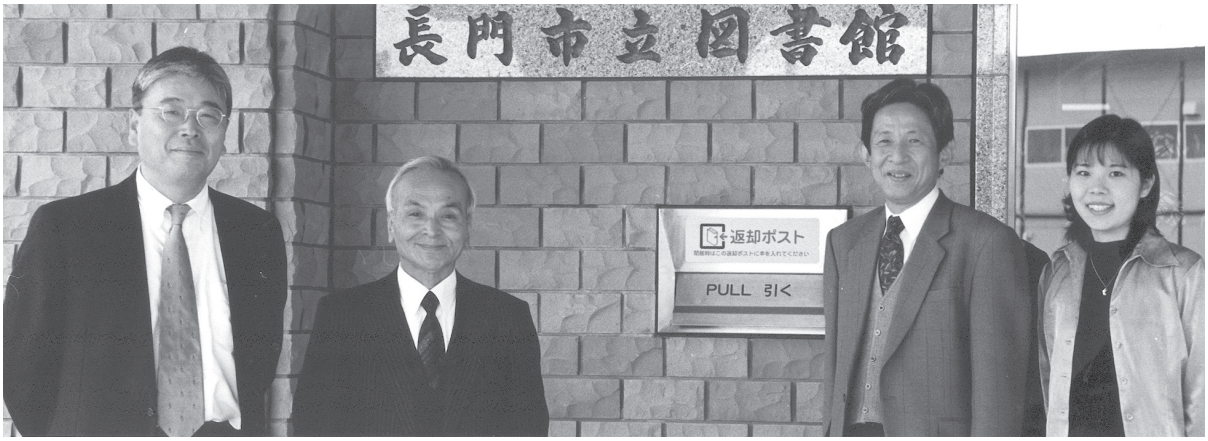
新市立図書館は、この10月１日オープンの出来たばかりの図書館である。おどろいたことに、館長の西村朝雄さんは、７年まえの平成３年度の別府大学司書講習の卒業生で、しかも、講習生100人の委員長をされた方であった。佐藤先生とは、７年ぶりの感激の再会であり、思い出話に花が咲いた。この間が新館の企画・準備・開館の７年間であり、西村さんが、その中心人物と言うことになるだろう。西村さんは、60才を過ぎてから司書講習を受講なさって司書資格を取得された。以後、市立図書館新館の準備に専念されて開館に際して館長を勤めておられる。この７年間のご努力がしのばれた。

人口２万５千人の長門市は、漁業と観光の街であり、かっては鯨漁りが盛んであったとのこと。この新図書館は鉄筋２階建ての瀟洒な建物で、街の中心部からやや離れた山沿いに建てられている。開館早々の新鮮な雰囲気にあふれた閲覧室は、中央にブラウジングコーナーが広く円形にセットされていて、気楽に親しめる場所になっている。低書架で、採光の良い明るい設計で、児童コーナーはかなり広い。一角には郷土史の特設コーナーがある。このコーナーでは、鯨漁の歴史や、地元の詩人金子みつ女史の資料が紹介されている。明治中期の日本水産株式会社の水産科学研究所編集の鯨漁の資料なども展示してあり、努力のあとがしのばれる。この図書館は、市の中心部とはシャトルバスで結ばれており、利用者はお年寄りと児童が多い、典型的な地方都市の住民密着型の図書館である。われわれが訪問した当日は、山口県下の14の市立図書館の館長会が予定されていた。

相部さんは、この図書館の最年少職員で、カウンターでレファレンスを担当する。名詞に印刷された「司書」の肩書きに、彼女の心意気が感じられた。われわれ教師としては、あの子供っぽい学生がよくも一人前になったものだと言う、胸が熱くなるような気持ちであった。彼女から就職の事情を聞いた。相場さんは自宅は隣りの下関市で、長門市には祖父母と叔母さんが居られるとのこと。その叔母さんが、長門市の市報で新図書館の司書募集を見て、彼女に連絡したのが始まりで、応募したのは８人だったそうだ。この中で１人の採用となった。８倍の競争率を突破しての正職員である。現在は祖父母の家からの、赤いホンダの Logo での通勤。若さと意欲にあふれた人柄だが、図書館員としてはまだまだこれから。館長さんの言によるとレファレンスの評判は良いとのこと。本人は、佐藤先生の演習の課題で鍛えられたから、と言う。その佐藤先生は、レファレンスは図書館の顔だから頑張って欲しい、と励ましておられた。

このような図書館が全国の多くの市町村に新設され、わが国の文化の底辺を支えるとともに、司書課程の卒業生の活躍の場として発展することを強く希望して、相場さんの笑顔に送られて長門市を後にした。こころ温まる一日であった。

（おかだ　しげる　別府大学図書館事務部長、非常勤講師）



左から佐藤先生、西村図書館長、岡田先生、相部さん